

その他いろいろ…



山路氏の事など

山路芳久氏とは、彼がウィーン国立歌劇場の専属ソリストとして活躍なさっておられる頃から、家族ぐるみで親しくおつき合ひさせていた。テノール・リリコと呼ばれる透き通った美声は独特のもので、この声に合った役柄はそれほど多くなかったにせよ、彼のステージは必ず聴衆を魅惑せずにおかないものだった。小生が氏のリサイタルの伴奏を引き受けて、同じステージに登ったことも忘れられない。

山路氏がミュンヘンに転居してからもお互いに尋ねあい、自宅に泊まりあってはごろごろと四方山話に花を咲かせた。ダイエットの競争などもやったりした。

その山路氏も、今は亡き人となってしまった。一九八八年十二月十九日、東京の御自宅で急性心筋梗塞のために急逝されたのである。享年三十八歳。あまりにも早すぎる、あっけない別れであった。

山路氏は普段から高血圧気味だった。日本での仕事は連日の第九をはじめ、相当なハードスケジュールでもあったのだろう。午前中のリハーサルから自宅に戻ったのち「気分が優れない」と医者に行って診察を受け、薬をもらい、「ちょっと晩御飯ができるまで横になってくる」と二階の自室に上がったのが、その最後の言葉だったという。まだ小学校にあがったばかりの上の娘さんが「パパ、御飯よ」と起こしに行った時には、もうなすすべもなかったそうである。

健康管理には普段から人一倍気をつけ、年一回人間ドックに入るのはもちろん、風呂から出たあとも、真夏でさえ裸足で歩いている姿を見た記憶がない。

お父さんそっくりのかわいい娘さん二人と、願いは何でもかなえてあげなかった事のないほど大切にしてい

いた奥様とを残し、悔やんでも悔やみ切れない死であつたろう。

彼には音楽雑学帳第三回目の時（一九八四年）にインタビュー形式で登場していただいた。以下にその文を御紹介させていただきます。

世界に名だたるウィーン、そしてミュンヘン歌劇場の専属歌手を経て、現在はフリーの名テノール歌手としてヨーロッパで、日本で、と世界をまたにかけて大活躍中の山路芳久氏は東京芸術大学を卒業後イタリア給費留学生としてローマに留学した。勉強のかたわら国際コンクールもたくさん受けている。

「全部で七、八回受けて、そのうち五回が一位、残りは二位で、その頃はあまりお金もなかったもので結構生活費の足しになりました」

とは簡単に言っても、受けるコンクール全てに入賞するのは並み大抵のことではない。この賞金の恩恵には、やはりその頃イタリアで留学生生活を送っていた有賀元美嬢も多分に預かっている。それ程優雅とはいえないかった海外における留学生生活の中で、賞金を手にするたびに中華料理店で彼女の好物をそれこそテーブルの上に乗りに切らない程注文してくれる山路氏の姿は、大変に印象深かったそうである。それが縁でか、元美嬢はほどなく山路夫人となり、二児の母親として、同時にマダム・バタフライなどの歌い手として現在活躍中である。

旅行やステージの数が増えると、体調には人一倍気をつけなくてはならない。有名なドイツの歌手、フィッシャー・ディースカウなどは楽屋へ絶対に他人を入れないし、握手もあまりしたがらない。プログラムへのサインもマネージャーがプログラムを集めてディースカウに手渡し、楽屋でサインを済ませた後、再度マ

ネージャーが配りに来る。もしファンの中に風邪をひいている人がいたとして、たとえ悪気はないにせよ、風邪をうつされたりしては迷惑する、との配慮からである。

他にも人によっては「アイスクリームのような冷たいものは声帯を冷やすから避ける」「煙草などとんでもない、同じ場所にいる人が喫うのもだめ」「酒も声帯を充血させるから良くない」「辛い刺激物も遠慮する」等々、非常にストイックな生活規律の話をよく耳にする。

山路氏は煙草も楽しみ、酒も決して強くはないが夕食の時に「夜良く眠れるように」とビールかワインを飲むことが多いようだ。

「もちろん声帯を痛めてしまつては歌えなくなつてしまうけれど、何事も多すぎなければいいんじゃないかなあ。いろいろな意味でやっぱり風邪が一番つらいですね。そうならないためには、良く食べて良く眠る事。これが最高」

晩酌も次の日にステージがある場合、用心して飲まない方が良いのか、気にせず飲んでぐっすり眠つた方が良いのかよく迷うそうである。

刺激性の強い食べ物なども

「別に声帯で物を食べるわけではないから構わないでしょ。もっとも食べ過ぎでおなかをこわしても、トイレに通いつめる程ひどくなければステージでは何とかなるし、別に力が入らない、という事はないみたいだよ」

食事を見ていると、日本食と御飯が大好きである。朝から御飯で構わない。ステージの時にも数時間前に必ず何か食べてから出かける。

「だっておなががすいてくると、声を出していてクラッと目がまわってくるからね」

「今までで一番冷や汗をかいた経験は？」

「いや冷や汗なんてしょっちゅうだけれども、そうだなあ……」

と、しばし考えた後、

「ミュンヘンの劇場で歌っていて、急に声が出なくなった時かなあ……。なに、実は息を吸うときに気管につばを吸い込んでしまっただけなんだけれども、何といても歌っている最中だったもので、これには困った。そのアリアはそれでも何とかこなし、その次に歌う場所が来るまでいろいろやってみても、こういうのってあせればあせる程、もとに戻らないんだよね。五分後の歌は幸い何人かでの重唱だったものでようやくの思いで切り抜け、大急ぎで楽屋に駆け戻って水を飲んだりかなり苦労した結果ようやく声は戻ったけれど、それでも高い声はうがやと。二十分後にあった二重唱では幸いあまり高い音がなかったので助かったけどね。理由は何であれ、声が出なかったら客席からブーが出ちゃうからね、大変だよ」

テノールの歌手はやはり高い声が勝負のかなめで、シヤドの高音が大きな聞かせどころとなる。山路氏の場合は充分ウォーミングアップして声を「暖める」としぐらいまでは無理なく出るのだそうだ。

「音域は訓練によって広がるし、ヒツとかキャツといった声が裏声でなくて出せるようであれば、勉強次第

ではテノールになれる可能性が大きいね。ただし変声期が終わらない前に無理をすると声を潰してしまい、これはもう元に戻らないから気をつけなといけない。話し声の質と歌う声の美しさとは全然関係ないみたいだなあ」

そう言われてみれば、劇場で聞く山路氏の素晴らしく艶のある美声とふだんの話し声とは、ちょっとつながりにくいような気もしないではない。

バレエ

バレエの世界には「稽古を一日休むと自分にわかり、二日休むと仲間にもわかり、三日休むと観客にもわかる」という厳しい戒めがあるのだそうだ。現在国際的に活躍中のプリマ・バレリーナ、森下洋子さんにウィーンでうかがった話を御紹介しよう。

世界中のいろいろな劇場で踊っていると、同じ役でも振り付けが違ふ事もあるでしょう。こういったステージでの動作は、演出家によってかなり厳密に指定されているものなのですか？

「そうです。振りつけの指定にはたとえばフォンテーンのもの、ヌレエフのもの、というようにいくつもの種類があって、劇場ごとに好みものを使っているようです。それをベースにした上で自分自身の表情や動きももちろんつけますけれど、そのあたりはパートナーと事前に必ず打ち合わせておかなくてはなりません」